大学経営政策研究
第９号（2019年３月発行）：69－85

日本における教養系学部のカリキュラム

－専門履修・LS・自由履修の３類型と学びの内容に着目して－

本　庄　秀　明

日本における教養系学部のカリキュラム

－専門履修・LS・自由履修の３類型と学びの内容に着目して－

本　庄　秀　明*

Liberal Arts Curricula in Japanese Universities:

A Focus on Three Curriculum Types and the Contents of Learning

Hideaki HONJO

Abstract

In this thesis, a liberal arts curriculum in Japanese universities is analyzed from the viewpoint of the curriculum structure and contents of learning. The analysis identified the following three types of curriculum structures: (1) students learn about specialized fields from the time of admission, (2) students can determine specialized fields after admission, and (3) students learn about various fields without deciding on any specialized field. The analysis clarified that curriculum structure and contents of learning differ depending on type. It is necessary to take into account the three curriculum types to analyze liberal arts curricula in Japanese universities. Furthermore, into which type each school of liberal arts is classified and which learning content each school provides depends on the history of the establishment in question. In addition, the specialized fields offered by the liberal arts schools in Japan are biased toward humanities, social sciences, and interdisciplinary fields.

はじめに

社会・経済におけるグローバル化が進展し、社会の高度化・複雑化が進む中で、新たに課題を発見し、解決策を提示することができる人材が求められている。これを受けて、1998年に出された文部省大学審議会答申「21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―」（21世紀答申）では、「学問のすそ野を広げ、様々な角度から物事を見ることができる能力や、自主的・総合的に考え、的確に判断する能力、豊かな人間性を養い、自分の知識や人生を社会との関係で位置付けることのできる人材を育てる」ことの必要性が謳われた。さらに2000年の同審議会答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」（グローバル化答申）では、上記のような人材を育成するために、「米国におけるリベラル・アーツ・カレッジのような教養教育を中心とした幅広い教育プログラムを持つ学部への改組転換を促進」することの必要性が検討され

＊東京大学大学院教育学研究科　博士課程

るようになった。

上記のような理念に加えて、大学側の事情もリベラル・アーツ教育を行う学部・学科（以下、「教養系学部」という。）の設置を促進した。すなわち、1991年の大学設置基準の大綱化により、国立大学の教養部は解体され、私立大学でも一般教育課程[1]の縮小、科目の変更などが行われた。このような動きの中で、それまで一般教育科目を担当していた教員の受け皿として、教養系学部を設置した大学もあったのである。

このように、教養系学部は理念上、経営上の必要性から設置が進められてきたが、リベラル・アーツの訳語として教養をあてたことによる誤解もあり、そのカリキュラムの実態についてあまり理解が深まっていないのが現状である。

そこで、本論文は、本庄（2018）で提示された教養系学部におけるカリキュラムの3類型に基づく分析の枠組みを用いて教養系学部のカリキュラム構造と学びの内容を明らかにすること、および、その分析枠組みの有用性を確認することを目的とする。

1． 先行研究

⑴ リベラル・アーツ教育の定義について

グローバル化答申の記載に見られるとおり、教養系学部は日本におけるリベラル・アーツ教育の主要な担い手として設置されたものと考えられる[2]。そこで、本論文における検討の前提として、リベラル・アーツ教育の定義について確認しておく必要がある。

吉田（1998）では、リベラルアーツ教育とは、職業的学問に対立する人格形成を目的としたリベラルアーツ学問を教えるカリキュラムであり、文学、哲学、歴史学、語学などの人文学、数学、物理、生命科学などの理学、社会科学、芸術などの分野の学士号を40％以上授与する高等教育機関をリベラルアーツと呼ぶとしている。絹川（2003）も、リベラル・アーツ教育の目標は、専門職業教育が目標とする直接的な知識、技能の習得とは異なり、思考力と判断力のための一般的知識を発展させることにあるとする。

このように、リベラル・アーツ教育は職業に直結しない学問分野であると定義されうるが、Yonezawa（2016）によれば、リベラル・アーツは欧米でさえ定まった定義がなく、東アジアのように多様な文化的背景を有する地域では、より多様化していることを指摘している。この指摘を踏まえれば、日本におけるリベラル・アーツ＝教養系学部も独自の発展をした可能性もあり、その実態を明らかにする必要性があるものと考えられる。

⑵ 日本の教養系学部に関する研究

カリキュラム研究についてレビューを行った関（2006）によれば、わが国では学士課程のカリキュラムに関する研究成果は多くなく、さらに、リベラル・アーツ系分野の伝統が希薄なこともあいまって、教養系学部については、欧米大学を対象とした先行研究や事例研究、あるいは日米比較研究が中心となっていると指摘している。また、日本の大学における教養系学部の研究としては、東京大学、国際基督教大学などの特定学部を対象とするものが中心であり、教養系学部を網羅的に

研究したものは見られないとしている。

最近では、石井（2007）、栗原（2014）などが、日本の教養系学部を対象として、学習到達目標から導かれる教育内容や学科名称などにより教養系学部の類型化を行っている。しかし、本論文の関心であるカリキュラム構造の観点には触れられていない。この点に関連して、本庄（2018）は、教養系学部の学生の学習志向性と学習行動の関係についての検討を行っている。この本庄（2018）は特定の学部の学生を対象とした研究ではあるが、分析結果から教養系学部のカリキュラムには、入学時点から特定の専門分野を学ぶ類型（以下、「専門履修型」という。）、入学後に専門分野を決定できる類型（以下、「LS型」（レイト・スペシャリゼーション型）という。）、専門分野を決定せずに自由に学ぶことができる類型（以下、「自由履修型」という。）という３つのカリキュラム類型がありうることを示唆している。

⑶　学士課程のカリキュラム構造を分析している研究

学士課程のカリキュラム構造を分析している先行研究として以下のものが挙げられる。吉田（2004）は、学部を単位としたカリキュラムに関する調査を実施し、大綱化によりカリキュラム編成の裁量権が学部にゆだねられた結果、専門教育の単位数にばらつきが生じ、特に人文、社会、学際系において内部分化が大きくなっていることを指摘している。また、杉谷（2004、2005）も専門教育の早期化の傾向が見られる理系に対して、人文系、社会系は教養教育や自由選択の単位数が多いなど履修要件の縛りが緩いことに加え、専門教育の幅が広い「専門教育の教養教育化」という現象がみられるとしている。さらに吉田（2008）はカリキュラムの４年間の構造にも着目し、文系においては、学習の幅を広げるための副専攻制度設置、履修順序において学生の履修の自由度を高めるシーケンスの緩和、卒業論文の非必修化などの傾向が見られるとしている。また、串本（2016）では、分野ごとに必修科目の割合、一般教育科目の割合などのカリキュラム構造と卒業率などのアウトカムとの関係性を分析している。但し、これらの研究は入学時点で専門分野を決定する学部を前提としているものである。本論文では、これらの先行研究の枠組みを用いつつ、入学後に専門分野を決定しうる教養系学部の特殊性を考慮に入れた分析を行うこととする。

２．課題の提示

本論文の目的は、教養系学部のカリキュラムのあり方に関する議論の前提として、そのカリキュラム構造と学びの内容を明らかにすることである。これまでのカリキュラム分析に関する先行研究では、主に科目区分ごとの割合や必修科目の割合、科目区分の関係などのカリキュラム構造を対象としてきたが、教養系学部では、カリキュラム類型の存在の可能性という特殊性があると考えられる。本論文では、先行研究での枠組みに加えて、本庄（2018）で提示されたカリキュラムの３類型に基づく枠組みにより教養系学部のカリキュラム分析も行い、その枠組みの有用性について確認することも目的とする。具体的には、以下の３つの課題により分析を行う。

⑴ 教養系学部のカリキュラム類型とその分布状況

課題1では、カリキュラムの3類型が日本の教養系学部にどのように分布しているかを確認することとする。本庄（2018）では、教養系学部のカリキュラムには、それぞれの専門教育課程における学びに関する考え方を反映した3類型が存在する可能性が示唆されており、教養系学部のカリキュラム分析の前提として、その存在を確認する必要があると考えられるからである。また3類型の存在が確認できた場合、3類型がどのような要因により規定されているかを明らかにすることとする。この点について、3類型は、新設か改組かという設置の経緯により、また改組の場合は設置母体に規定されているという仮説を提示する。新設か改組かは教員の構成に影響を与え、その結果としてどのようなカリキュラムを提供するかも左右すると考えられるからである。また、入学時点で専門分野が決まっているという点で他分野の学部に類似する専門履修型は単独学部の改組、他分野の学部と異なる点が多いと考えられるLS型は新設もしくは複数学部の改組、自由履修型は新設により設置されているという仮説も提示する。なお、設置の経緯等の影響力が大きいと考えるため、設置年度や偏差値は3類型を規定しないものと考える。

⑵ 教養系学部のカリキュラム構造

課題2では、吉田（2004）らの研究を参考に、科目区分ごとの割合や必修科目の割合などのカリキュラム構造について分析を行う。その上で、課題1で確認したカリキュラム類型ごとの分析も行う。

課題2については、以下のような仮説を提示する。まず、教養系学部と他の学部との比較という観点では、人文学・社会科学分野の学部と同様の傾向を示すものと考えられる。後に検討するが、教養系学部の多くは人文学・社会科学分野の学部をその母体とし、類似した教育を提供していると考えられるからである。但し、カリキュラム類型によって、一般教育科目、専門教育科目、自由科目の割合や必修割合などに違いが生じるものと考えられる。カリキュラム類型は専門教育課程における学び方に関する学部の考え方が反映されているため、科目区分の割合や必修割合に影響を及ぼしているものと考えられるからである。

⑶ 一般教育課程および専門教育課程の学びの内容

教養系学部のカリキュラムの実態を明らかにするためには、カリキュラム構造だけでなく、どのような分野を学ぶことができるかなどの学びの内容についても明らかにする必要がある。そこで、課題3では、カリキュラム類型と一般教育課程および専門教育課程の学びの内容との関係について分析を行う。課題3に関する仮説は以下のとおりである。

3類型は専門教育課程での学び方に対する考え方が反映されていることから、3類型により専門教育課程の学びの内容の幅が異なると考えられる。また、専門教育課程の学びの内容の幅の違いが一般教育課程の学びの内容にも影響を与え、一般教育課程における知識とスキルのバランスに違いが生じているものと考えられる。

これらの3つの課題を通じて、本庄（2018）により示唆されたカリキュラム類型が存在し、カリキュラム類型が教養系学部のカリキュラム構造や学びの内容に影響を与えていることを明らかにす

ることができる。これらの結果として、教養系学部のカリキュラムを分析、検討するにあたっては、従来の分析枠組みに加えて、カリキュラム類型に基づく分析枠組みを用いることの必要性を確認することができる。併せて、カリキュラム類型は、教養系学部の設置の経緯に規定されていることも明らかにすることができる。

3．研究対象および分析方法

研究対象は、我が国に設置されている教養系学部である。本論文でいう教養系学部とは、学部・学科名称にリベラル・アーツの訳語と考えられる「教養」、および「リベラル・アーツ」、「リベラル」という文字が含まれている学部・学科のことを指し、大学ポートレートの検索機能を用いて33学部・3学科を抽出した。なお、教養系学部以外にもリベラル・アーツ教育を行っている学部・学科（以下、学部・学科を合わせて「学部」という。）は存在しうるが、本論文は、リベラル・アーツの訳語としての教養についての定義が明確になっていないという問題点を出発点としているため、研究対象の抽出方法として、上記を採用することとする。また、今回の調査対象は36大学の教養系学部であるが、同一学部において異なるカリキュラムを有する場合は、それぞれを分析対象としたため、サンプル数は54カリキュラムとなっている。本論文の定義によれば東京大学教養学部も研究対象となるが、前期課程の教養学部、後期課程の教養学部が存在するなど、他の教養系学部と異なる点が多く、同列に論じられないと判断したため、今回の研究対象からは除外した。

上記の定義に基づく教養系学部に対して、2018年6月に卒業要件、卒業必要単位数等を記載した学部要項、学生便覧、履修の手引き等の送付を依頼し、20学部から提供を受けた。学部要項等の提供を受けられなかった教養系学部については、当該学部のホームページ等の公開情報を使用した。

まず、課題1については、本庄（2018）を参考にした分類方法により、教養系学部のカリキュラム類型の抽出を試みる。すなわち、専門履修型は、学部の中に単一もしくは複数の学科が設置され、原則として入学から卒業まで同一の学科で、コース、科目群、クラスター等（以下、「メジャー」という。）を選択することなく学ぶ学部である。次にLS型は、学部の中にメジャーが設置され、2年次もしくは3年次にメジャーを選択し、そのメジャーの定めに従い履修する学部をいう。最後に自由履修型は、学部に複数の分野による科目群が設定されているが、いずれの科目群からも自由に科目選択できることを特徴とする学部である。

続いて、課題2では、学士課程のカリキュラムを分析した先行研究に従い、科目区分ごとの単位数、科目区分相互の関係および必修割合などを分析し、他の学部との比較およびカリキュラム類型ごとの分析を通して教養系学部のカリキュラム構造を明らかにすることとする。

科目区分について定義すると、一般教育科目とは、各学部で主に1、2年次に学ぶ科目で、吉田（2006）によれば、「知識」、「英語」、「英語以外の外国語」、「スキル」、「情報リテラシー」、「大学教育への適応支援」などの内容を学ぶものをいう。自由科目とは、一般教育科目、専門教育科目の所定単位数を超過して履修した部分や他学部の科目など、履修すれば卒業に必要な単位として算入される科目をいう。なお、先行研究で明らかになったデータは、各大学・学部のアンケートに対する回答結果によるものであるため、必ずしも上記と同様の分類が行われているとは限らないが、全体

の傾向を確認するためには問題が無いと判断し、比較を行うこととした。

課題３は、教養系学部の学びの内容を対象としている。一般教育課程については、吉田（2006）を参考にして、「知識」、「英語」、「英語以外の外国語」、「スキル」、「その他」という分類を用いることとする。吉田（2006）では、「情報リテラシー」、「大学教育への適応支援」などの区分も使用されているが、本論文ではいずれも「スキル」にまとめている。

専門教育課程は学問分野に基づいていることを前提として、平成30年度の科学研究費助成事業で使用されている大分類を使用した。なお、「総合」、「複合」という名称が付されている分野については、「学際」に分類した。また、それぞれのカリキュラムでどのような分野を学べるかについては、原則としてカリキュラム・ポリシーから読み取れる分野をそのカリキュラムで学べる分野とし、カリキュラム・ポリシーに記載が無い場合は、専攻やコースの名称から読み取れる分野をそのカリキュラムで学べる分野とした。

４．分析

⑴　教養系学部のカリキュラム類型とその規定要因

はじめに、本庄（2018）において存在の可能性が示唆された専門履修型、LS型、自由履修型の３類型を教養系学部から抽出できるか確認することとする。表１は、前節記載の定義に基づいて教養系学部のカリキュラムを分類したものである。

学部数では、LS型が18学部と一番多く、次いで自由履修型の10学部、専門履修型の８学部となっている。このように、教養系学部には３類型が存在し、特に、LS型と自由履修型が多数を占め、他分野の学部と異なり、入学時に専門分野を決定することを求められない学部が多いという特徴を見出すことができた。

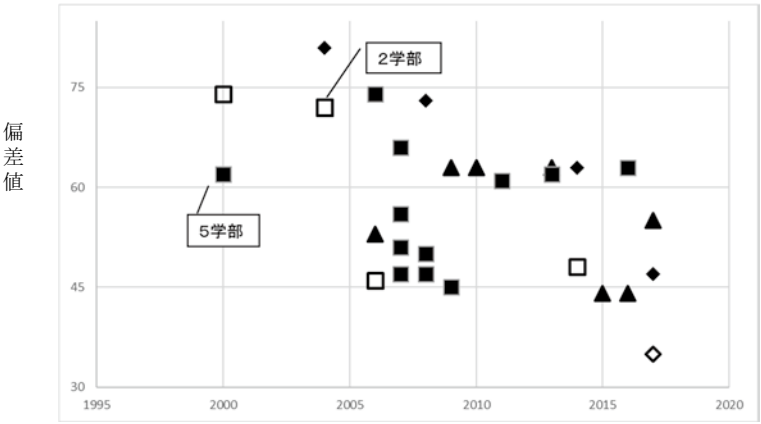
表１　教養系学部のカリキュラム類型

類型	学部数(学科数)	大学名	備考
専門履修型	8（20）	東北学院④、東京女子④、東海⑥、大阪国際②、南山大学① 神戸女子（文）、同志社女子（学芸）、名古屋商科（国際）	※丸数字は学科数 ※神戸女子、同志社女子、名古屋商科は学科として設置 （　）は学部名
LS型	18（24）	国際教養(2)、埼玉(5)、桃山学院(4)、宮崎国際(3) 国際基督教(31)、追手門学院(3)(3)、千葉(3)、上智(3) 順天堂(3)、獨協(8)、桜美林(33)、玉川(7) 山梨学院(8)、帝塚山学院(3)、福岡女子(5) 名古屋外国語(3)、日本(4)、横浜市立(4)	※（　）は選択できるメジャー数 ※追手門学院大学は２学科でそれぞれ３メジャー提供
自由履修型	10（10）	中国学園(1)、中京大学(4)、千葉商科(2)、法政(1) 早稲田(7)、創価(3)、開智国際(4)、中央学院(4) 群馬県立女子(3)、昭和女子(3)	（　）は提供している分野数

※各大学ホームページより筆者作成

次に図１は、カリキュラム類型の規定要因を明らかにするため、設置申請書類、ホームページ等で設置の経緯が明らかになった33カリキュラムについて、設置年度を横軸、偏差値を縦軸とした散布図に表したものである。また、33カリキュラムについて、３つのカリキュラム類型と新設もしくは改組という設置経緯の組み合わせにより、【専門履修×改組】、【LS×新設】、【LS×改組】、【自

図１　カリキュラム分類の分布



▲：専門履修×改組　□：LS×新設　■：LS×改組　◇：自由履修×新設　◆：自由履修×改組
※偏差値は旺文社2017（平成29）年度用　大学の真の実力　情報公開BOOK」より

由履修×新設】、【自由履修×改組】という分類を行った。

まず、専門履修型についてみてみると、新設は無くすべて改組である。そして、専門履修型は以下の２つの類型に分けることができることがわかった。１つ目は、人文系を中心とする既存学部を母体とし、それぞれの専門分野ごとに学科を維持している類型である。この類型では、学科数は４～６と比較的多い。もう１つは、学科として設置されている類型である。この類型では単独の専門分野を学ぶことが多い。

次にLS型をみてみると、新設も見られるが多くは改組による設置である。また、文学部を中心に学内の複数の学部を母体としたものが目立つ。さらに、LS型に分類されている24カリキュラムのうち、15カリキュラムが学部名称等に「国際」を含んでいることも特徴ということができる。これらは、教養系学部の中でも、アメリカのリベラル・アーツ・カレッジを強く意識していると考えられ、このこともメジャー制度を導入する要因となっているとも考えられる。

最後に自由履修型である。自由履修型も改組型が多く、その母体としては、教養部の他、早稲田大学の別科国際部や法政大学のグローバル学際研究インスティチュートなど学部以外の組織もみられる。また、複数の組織ではなく、単独の組織を母体とする学部が多くみられる。従って、もともと分野数が少ない、あるいは分野ごとの縦割り構造が存在しないため、自由な履修をその特徴としているものと考えられる。

上記の分析をまとめると、日本の教養系学部には３類型が存在し、その中でもLS型が多数を占めているといえる。また、多くが改組により設置されており、３類型は、仮説で提示した新設か改組かという設置経緯ではなく、設置母体により規定され、設置母体が既存の単独学部の場合は、専門履修型、既存の複数学部の場合は、LS型、学部以外の組織の場合は、自由履修型という傾向が見られた。また、母体となる既存学部は、人文、社会系を中心とすることも明らかになった。なお、選抜性や設置年度は、３類型を規定していないということも明らかになった。

⑵ 教養系学部のカリキュラム構造

本項では、教養系学部のカリキュラム構造を明らかにすることとする。

表２は、４年制の学士課程における卒業必要単位数に占める一般教育科目の単位数の割合に関する分析結果で、串本（2016）で作成された表に教養系学部のデータを追加したものである。結果をみると、教養系学部における一般教育科目の単位数の割合は30％と一番大きいものの、全体の傾向としては、他の分野と同様、大綱化以降、一般教育科目の割合が減少していることがわかる。

表２　卒業必要単位数に占める一般教育科目の割合

	人文	社会	理学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術	ほか	**教養系**
N	305	503	54	167	41	159	83	108	58	186	**54**
平均	0.26	0.26	0.27	0.27	0.3	0.2	0.22	0.23	0.26	0.25	**0.3**
SD	0.1	0.09	0.1	0.09	0.06	0.06	0.08	0.07	0.1	0.09	**0.12**
Min	0.02	0.03	0.06	0.09	0.16	0.08	0.03	0.06	0.03	0.03	**0.04**
Max	0.61	0.63	0.49	0.75	0.45	0.44	0.51	0.51	0.66	0.56	**0.59**

出典：串本（2016）および各大学資料を参考に筆者作成

但し、カリキュラム類型ごとに一般教育科目の割合を確認したところ、専門履修型は28％、LS型は33％、自由履修型は26％となっているようにカリキュラム類型によりばらつきがあることがわかった（表３）。これらの平均値に有意な差は生じていなかったが、LS型において、一般教育課程を重視している可能性を見出すことができる。それでは、一般教育科目の単位数の減少は専門教育科目の単位数の上昇をもたらしたのであろうか。

表３　カリキュラム類型別一般教育科目の割合

	教養系	専門履修	LS	自由履修
N	54	20	24	10
平均	0.30	0.28	0.33	0.26
SD	0.12	0.12	0.12	0.10
Min	0.04	0.04	0.16	0.11
Max	0.59	0.59	0.59	0.39

出典：串本（2016）および各大学資料を参考に筆者作成

表４－１はやや古いデータではあるが、杉谷（2002）で作成された表に教養系学部のデータを追加して比較したものである。この表で見る限り、減少した一般教育科目の単位数は、専門教育科目の単位数の上昇をもたらさず、文学部、教養系学部ともに自由科目の単位数の増加につながっている。杉谷（2002）では、文学部のカリキュラムに「幅広さ」をもたらす要因として、学びの内容の幅広さに加えて、自由科目の単位数の増加による科目選択の幅広さを挙げているが、後者については教養系学部全般にもあてはまるのではないかと考えられる。

しかし、カリキュラム類型ごとに分析を進めたところ、以下のような違いを見出すことができた（表４－２）。すなわち、３類型のうち、専門履修型では、一般教育科目の割合がやや低く、自由科目の割合がやや高くなっている。これに対して、LS型では、一般教育科目の割合が比較的高くなっ

表４－１　卒業必要単位に占める各科目区分の割合

	旧設置基準	文学部	**教養系学部**
一般教育科目の割合	0.39	0.28	**0.3**
専門教育科目の割合	0.61	0.58	**0.52**
自由科目の割合		0.14	**0.18**

出典：杉谷（2002）および各大学資料等により筆者作成

表４－２　カリキュラム類型別各科目区分の割合

	教養系学部	専門履修	LS	自由履修
一般教育科目の割合	0.30	0.28	0.33	0.26
専門教育科目の割合	0.52	0.51	0.49	0.58
自由科目の割合	0.18	0.21	0.18	0.16

ている。また、自由履修型は、一般教育科目の割合が比較的低く、専門教育科目の割合が高くなっている。なお、科目区分の割合の平均値について、カリキュラム類型ごとに一元配置分散分析を行ったところ、10％水準ながら、専門教育科目の割合について、LS型と自由履修型において有意な差が生じていた。

また、串本（2016）では、選択必修も含む全体の必修割合についても分野ごとの分析を行っている。表５－１は、串本(2016)で作成された４年制学士課程の必修割合を示す表に教養系学部のデータを追加したものである。

表５－１　必修（選択必修）の割合

	人文	社会	理学	工学	農学	保健	家政	教育	芸術	ほか	**教養系**
N	305	503	54	167	41	159	83	108	58	186	**54**
平均	0.42	0.35	0.50	0.48	0.50	0.81	0.58	0.49	0.49	0.41	**0.47**
SD	0.22	0.23	0.22	0.20	0.18	0.16	0.23	0.26	0.23	0.22	**0.18**
Min	0.03	0.00	0.07	0.00	0.16	0.17	0.10	0.04	0.06	0.00	**0.17**
Max	1.00	1.00	1.00	1.00	0.92	1.00	1.00	1.00	0.94	1.00	**0.89**

出典：串本（2016）および各大学資料等を参考に筆者作成

全般的には、教養系学部の必修割合は人文や社会よりも高く、理学、工学などの理系学部と同水準にあることがわかる。次に、カリキュラム類型別に全体の必修割合を確認すると専門履修型の必修割合が３類型の中では低くなっていることがわかる（表５－２）。また、同じく表５－２にカリキュラム類型別の一般教育課程と専門教育課程のそれぞれの必修割合を示した。その結果、３類型の比較においては、専門履修型については、一般教育課程、専門教育課程ともに必修割合が低いこと、LS型では一般教育課程の必修割合が高いこと、自由履修型では一般教育課程と専門教育課程の必修割合が高いことがわかった。

表５－２　カリキュラム類型別必修（選択必修）割合

	専門履修	LS	自由履修
全体	36.6	50.8	50.4
一般教育課程	53.3	78.7	70.7
専門教育課程	45.3	53.3	55.9

出典：各大学資料により筆者作成

これらの結果をまとめると、専門履修型は、３類型の中では、自由科目の割合が高く、必修の

割合が低い傾向にあることがわかる。これは、専門履修型では、専門分野という学びの大枠が定まっているため、その大枠の中まで細かい履修規程を設定する必要がないからと考えられる。次に、LS型は、一般教育科目の単位数の割合と必修割合を高めている。LS型は、一般教育科目の履修を通じて専門分野を決定するという類型であることから、一般教育課程での学びを充実させているものと考えられる。最後に、自由履修型は、専門教育科目の単位数の割合が３類型の中では高いという特徴があった。自由履修型は、専門教育課程における自由な学びを特徴とし、その選択の幅を確保する必要性があるため、専門教育課程に配当される単位数が多くなっているものと考えられる。また、専門教育課程での必修割合を高めることにより学びの大枠を設定しようとする工夫が見られた。例えば、早稲田大学、法政大学、中京大学のように、専門教育課程において、科目をレベル別に分類し、その入門段階では、選択必修科目を課すことにより、特定の分野の履修に集中しないような工夫を行うことによって、一定の学びの枠を設定している学部が見られた。

このように、教養系学部のカリキュラム構造は全体としては人文系の学部と同様の傾向が見られたが、仮説で提示したとおり、カリキュラム類型により異なる結果となることがわかった。

⑶　一般教育課程および専門教育課程の学びの内容

前項では、主に単位数という観点から教養系学部のカリキュラム構造に迫った。次に本項では、教養系学部の学びの内容について分析を進めることとする。まず、大綱化前の一般教育課程は人文科学系、社会科学系、自然科学系の３分野の配分必修と外国語科目および保健体育科目だけであった。表６は、現在の教養系学部において「知識」、「英語」などに分類される一般教育科目が54カリキュラムのうちのいくつのカリキュラムにおいて必修として配当されているかを示す表で、これをみると、大綱化以前のカリキュラムにもみられた人文科学・社会科学・自然科学の３系列の知識科目や英語科目が多くのカリキュラムで配当されていることに加え、スキルに分類される科目も多くのカリキュラムで配当されていることがわかる。このスキルに分類されているのは、教養に関する概論科目などの人間形成に資する科目や、アカデミック・スキルを育成する科目、キャリア科目などである。大綱化後は、学士課程教育において一般教育課程のスキル化が進んだと言われているが、教養系学部にも同様の傾向が見られることがわかる。なお、知識に関する科目について注意してみると、専門教育課程の基礎となりうる人文科学・社会科学・自然科学の３系列の知識を内容とする配分必修制度を教養系学部の約70％のカリキュラムが残している点が特徴的である。杉谷（2002）によれば、配分必修制度を採用している文学部が43.7％と半分を切っていることと対照的である。

表６　一般教育科目（必修）の内容

	知識	英語	英語以外の外国語	スキル	その他
カリキュラム数	48	50	33	49	32
平均単位数	14.2	9.4	5.4	8.5	2.9

出典：各大学資料等を参考に筆者作成

続いて、表７は、カリキュラム類型ごとに一般教育科目の内容を分析した結果である。具体的に

はそれぞれのカリキュラム類型において表６に記載した内容に対応する科目がどの程度配当されているか確認するために、カリキュラム類型ごとの単位数の平均を比較したものである。

表７　カリキュラム類型ごとの一般教育科目の内容

カリキュラム類型	知識	英語	外国語	スキル
専門履修型①	12.4	7.1	2.5	10.6
LS型②	15.8	10.6	4.0	5.7
自由履修型③	5.3	7.5	3.2	6.8
有意水準	***			
多重比較	①＞③ ②＞③			

出典：各大学資料等を参考に筆者作成
***：P＜0.01

まず、専門履修型では、知識およびスキルの平均が比較的大きいことがわかる。このうち、知識については自由履修型と有意な差が生じている。次にLS型であるが、知識、英語の単位数が３類型の中では多く、スキルは少ない。このうち、知識は自由履修型との間で有意な差が生じている。最後に、自由履修型であるが、他の類型と比較して有意に知識が少なく、それぞれの区分に単位数が均等に配分されていることが特徴的である。このように、教養系学部の一般教育課程は、他の分野と同様、全般的には、スキル科目を中心に学びの内容の幅が広がっている傾向にあるといえる。しかし、その広がり方には多様性が見られる。例えば、専門履修型は、知識とスキルに関する単位を比較的多く配置している。これは、将来の専門分野がすでに決定しているため、一般教育課程は専門教育課程の準備と位置づけられていると考えられるからである。次に、LS型では、知識と英語に重点が置かれている。一般教育課程での学びを通じて将来の専門分野を決定することを特徴とするため、知識科目を多く配置しているものと考えられる。また、「国際」を冠する学部が多く含まれることから、英語科目が多くなっていると考えられる。最後に、自由履修型は、必修割合が高い中で知識、英語、外国語、スキルのバランスを意識した配置となっている。専門教育課程において自らの選択によりカリキュラムを組み立てることを求める類型のため、一般教育課程においては、バランスよく基礎を固めることを意図している傾向にあるものと考えられる。これらの結果は、提示した仮説と概ね一致していると言える。

続いて、教養系学部の専門教育課程の学びの内容について確認することとする。表８は、それぞれのカリキュラム類型で提供されている分野数を示している。

まず、全体の傾向では、人文学と社会科学が75％と大部分を占めており、この傾向はいずれのカリキュラム類型でも変わらない。また、職業に直結する工学、農学、医歯薬学はいずれのカリキュラム類型でもほとんど存在しておらず、教養系学部は、リベラル・アーツの伝統を引き継いでいるものと言える。

カリキュラム類型ごとの特徴をみてみると、専門履修型は人文学、社会科学と学際を中心とし、上位の３分野だけで82.8％を占めている。専門履修型の多くは、それぞれの分野ごとに学科を維持している教養系学部が含まれていることから、特定の分野を重複して提供する学部が多くなってい

表８　専門教育課程における分野

カリキュラム類型		人文学	社会科学	数物系科学	環境学	情報学	化学	工学	生物学	農学	医歯薬学	学際	合計
全体(54カリキュラム)	分野数	114	90	10	7	7	2	1	4	0	1	36	272
	割合(%)	41.9	33.1	3.7	2.6	2.6	0.7	0.4	1.5	0.0	0.4	13.2	100.0
専門履修型(20カリキュラム)	分野数	21	21	3	4	3	0	0	1	0	0	11	64
	割合(%)	32.8	32.8	4.7	6.3	4.7	0.0	0.0	1.6	0.0	0.0	17.2	100.0
LS型(24カリキュラム)	分野数	68	48	6	1	2	2	1	2	0	1	24	155
	割合(%)	43.9	31.0	3.9	0.6	1.3	1.3	0.6	1.3	0.0	0.6	15.5	100.0
自由履修型(10カリキュラム)	分野数	25	21	1	2	2	0	0	1	0	0	1	53
	割合(%)	47.2	39.6	1.9	3.8	3.8	0.0	0.0	1.9	0.0	0.0	1.9	100.0

出典：各大学資料を参考に筆者作成

るものと考えられる。また、学際に含まれる分野が比較的多く提供されているのも特徴だが、この点については、吉田（2008）が、人文・社会系学部において、学際化により履修の自由度を確保する傾向が増えていることを指摘しているが、限定された学問分野を提供するという点で他の学部と共通する専門履修型の教養系学部にも同様の指摘が可能と考えられる。

続いてLS型は、人文学と社会科学が中心という点は同様だが、数が少ないながらも理系分野を含めて幅広い分野を提供する教養系学部が含まれている。LS型の多くが、文学部を中心とした複数学部を母体にしていることがその理由と考えられる。

最後に自由履修型は、人文学、社会科学だけで86.8％を占めていることが特徴的であり、学べる分野は限定的である。単独の組織を母体とすることが多く、LS型に比べて教育資源が限定されていることがその理由と考えられる。また、学際系の分野がほとんど提供されていないのも特徴として挙げられる。

このように、人文学、社会科学を中心とするという傾向はいずれのカリキュラム類型においても共通してみられたが、提供している分野の幅、学際系の提供数などは、カリキュラム類型により違いが見られ、仮説を支持する結果を得ることができた。一般教育課程の内容もカリキュラム類型により違いが見られたことから、教養系学部のカリキュラムを分析するにあたっては、他の学部と異なり、カリキュラム類型という分析の枠組みを用いることが重要であるということがわかった。また、これらの結果は、学士課程のカリキュラム分析を行うにあたっては、分野別という観点だけではなく、当該学部の設置の経緯、設置母体なども考慮する必要があることを示唆している。

おわりに

本論文は、日本におけるリベラル・アーツ教育の担い手の一つとして考えられる教養系学部のカリキュラムの構造および学びの内容に迫ったものである。

分析の始めに、先行研究を参考にカリキュラム類型の抽出を試みた。その結果、先行研究が示唆するとおり、専門履修型、LS型、自由履修型の３類型を抽出することができ、LS型や自由履修型という入学時点で専門分野を決定することを求められない類型が多数を占めることが明らかになっ

た。また、教養系学部の多くは改組により設置され、３類型はその設置母体に規定されうることが明らかになった。

さらに、本論文では、この３つの類型を分析枠組みとして、教養系学部のカリキュラム構造や学びの内容を分析し、以下の点を明らかにすることができた。教養系学部のカリキュラム構造は全般的にはその主な母体の一つである人文系の学部に近く、学びの内容に関しては、一般教育課程は他の分野と同様スキル化が進み、専門教育課程は、母体の影響の下、人文学、社会科学を中心に学際分野を加えたものとなっていることが明らかになった。

しかし、３類型ごとに分析すると、以下のような違いがあることも明らかになった。すなわち、専門履修型は、自由科目の割合が高く、必修割合が低いことがわかった。専門履修型は、入学時の段階で分野を決定する類型であることから、学びの内容についての大枠が定まっていることがその理由と考えられる。また、既存学部の学科を前提としていることが多いため、専門教育課程で提供される分野の幅は狭く、一般教育課程は専門教育課程の準備として、知識とスキルの習得を重視している傾向が見られた。

LS型については、一般教育科目の割合が高く、必修割合も高いという結果が得られた。また、一般教育課程では知識を重視し、専門教育課程で提供される分野は比較的広いという結果が得られた。これは、LS型は、一般教育科目の履修を通じて専門教育課程における分野を決定するという特質から、一般教育課程を重視していることの表れと考えられる。

最後に自由履修型は、専門教育課程での自由な学びを特質とするため、専門教育科目の割合が比較的高くなっているという特徴が見られた。また、学びの内容に関する大枠が定まっていないことから、専門教育課程の最初の段階では様々な分野の入門レベルの科目など特定の科目群の履修を求めるなど必修割合を高める傾向にあることもわかった。しかし、単独の組織を母体とすることが多いことから提供されている分野は限定的であるという特徴が見られた。

このように、本論文では、教養系学部のカリキュラム構造と学びの内容について他分野との比較等を通して全般的な特徴を明らかにするとともに、教養系学部の３つのカリキュラム類型を抽出し、カリキュラム類型ごとの特徴を明らかにしてきた。そして、カリキュラム類型は、カリキュラム構造や専門教育の内容のみならず一般教育の内容にも影響を与えていることが明らかになった。このことから、教養系学部のカリキュラム分析にあたっては、先行研究で用いられたカリキュラム分析の枠組みだけでは、そのカリキュラム構造および学びの内容の実態を明らかにすることはできず、先行研究の枠組みに加えて、カリキュラムの３類型に基づいた分析枠組みを用いることの必要性が明らかになった。

最後に本論文の課題を提示することとする。本論文では、学部名称等により教養系学部を定義づけて研究対象としてきたが、教養部を母体にするなど同様の経緯で成り立っている広義の教養系学部は他にもありうると考えられる。研究対象を広義の教養系学部まで広げた場合でも本論文での知見があてはまるかどうかを確認する必要がある。また、教養系学部のカリキュラム類型は、設置母体に規定される可能性を見出したが、この点を確認するためには設置申請書等により詳細に分析を行うとともに、当該大学の他の分野の学部の設置状況などを考慮した分析を行っていくことが必要

である。

冒頭に記載したとおり、理念上および大学の経営上の観点から、広義の教養系学部はその数を増やし、我が国の高等教育において重要な役割を果たすことが期待されている。上記の課題を念頭に、教養系学部のカリキュラム分析をさらに進めていくことが必要である。

注

1　本論文では、一般教育科目により構成される科目群を一般教育課程、専門教育科目により構成される科目群を専門教育課程と呼ぶこととするが、大学設置基準の大綱化前に存在した一般教育課程、専門教育課程とは異なるものである。

2　本論文において今回抽出した36の教養系学部のうち、32学部が「グローバル化答申」が出された2000年代以降の設置であることや、23学部が学部名称の英語表記として、「Liberal Arts」、４学部が「Arts and Sciences」、３学部が「Liberal Studies」を使用していることからも本論文で定義する教養系学部がリベラル・アーツ教育の担い手であることがわかる。

文献

本庄秀明（2018）「教養系学部のカリキュラムが学習行動・獲得能力に及ぼす影響－Ａ大学教養系学部学生アンケート調査の結果から－」『大学経営政策研究』8，39-53

石井雅子（2007）「リベラルアーツ教育の日本型形態」東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士論文

絹川正吉（2003）「ICU（国際基督教大学）教養学部カリキュラム」有本章編『大学のカリキュラム改革』玉川大学出版部，pp.122-138

栗原郁太（2014）「現代日本における教養系学部の類型－教育内容から見た分析－」東京大学大学院教育学研究科大学経営・政策コース修士論文

串本剛（2016）「学士課程の構造とアウトプット指標の関係－専門分野別の分析－」『「大学教育改革の実態の把握及び分析等に関する調査研究」調査報告書』，54-62

文部省大学審議会（1998）『21世紀の大学像と今後の改革方策について―競争的環境の中で個性が輝く大学―（答申）』
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315917.htm）（2018年６月23日最終アクセス）

文部省大学審議会（2000）『グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について（答申）』
（http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_daigaku_index/toushin/1315960.htm）（2018年６月23日最終アクセス）

関正夫（2006）「大学カリキュラム改革に関する研究の回顧と展望－学士課程教育を中心として－」『大学論集』36，31-67

杉谷祐美子（2002）「文学部のカリキュラムの幅広さ－自然科学系分野の履習を含めて－」『これからの研究開発と人材養成等の諸政策の連携・統合に関する調査研究　平成13年度年次報告（最終報告）』，71-86

杉谷祐美子（2004）「学士課程カリキュラムの編成状況－教養の専門化か、専門の教養化か（下）」『アルカディア学報』No.173

杉谷祐美子（2005）「日本における学士学位プログラムの現況」『高等教育研究』8：29-52

Yonezawa, A (2016), Revisiting Key Values, Roles and Challenges of Liberal Arts Education in East Asia, Jung, I, Nishimura, M & Sasao, T, Liberal Arts Education and Colleges in East Asia (pp.125-136). Singapore

吉田文（1998）「教養教育のカリキュラムとは何か－アメリカの場合－」『教養的教育からみた学部教育改革－広島大学の学部教育に関する基礎的研究(4)－』，28-38

吉田文（2004）「学士課程カリキュラムの編成状況－教養の専門化か、専門の教養化か（上）」『アルカディア学報』No.172

吉田文（2006）「教養教育と一般教育の矛盾と乖離：大綱化以降の学士課程カリキュラムの改革」『高等教育ジャーナル』14，21-28

吉田文（2008）「学際的カリキュラムの陥穽－人文・社会系学部の学士課程カリキュラム」『名古屋高等教育研究』8，155-172